

**中山間地域における多機能共生型事業「あったかふれあいセンター」の評価（その2）****－利用者調査による利用の効果に関する分析－**

○ 日本福祉大学地域ケア研究推進センター 金 圓景 (7133)

奥田佑子 (日本福祉大学・5550)、平野隆之 (同・814)、冷水豊 (同・395)、斉藤雅茂 (同・5854)、藤田欽也 (同・8062)

キーワード：中山間地域、多機能共生型事業、利用効果

**1. 研究目的**

ここでは、報告（その1）を受けて、「あったか」の「集い」をはじめ「見守り訪問」や「外出支援」、「生活支援」、「相談」といった機能を利用することによって利用者の生活にどのような効果があるかの評価、および今後必要となる支援内容はどのようなものかについて利用者の立場から明らかにすることを目的とする。

過疎化・高齢化が進む中山間地域では、各自治体の財政状況が厳しいことから地域住民のニーズに合った、対象別の様々な福祉サービス提供機関を設置することは簡単ではない。さらに、介護市場の民営化により、民間事業所の参入が少ない中山間地域だからこそ、各地域の実情に応じた柔軟なサービスが提供できる拠点が求められる（高知県 2010）。これらの現状を考慮し、「あったか」の利用効果を確認することの意義が大きい。

**2. 研究の視点および方法**

本研究では、利用者への面接調査から「あったか」の効果や課題を検討する。利用者には高齢者や障害者などが多いことから質問内容の誤解や記入漏れなどを防ぐため、普段から接している「あったか」の職員による面接調査を行った（星野ら 2002）。調査項目は、利用者の基本属性、「集い」への参加による効果・影響、集い以外の「あったか」による支援の内容とその効果、および今後「あったか」から受けたい援助である。

調査は、高知県内の全ての「あったか」31か所で実施したが、今回の報告では、サテライト型サロンを積極的に展開し、行政の地域福祉計画に積極的に「あったか」を位置付けていることから日本福祉大学と高知県庁が重点的な事例研究の対象とした5市町村にある8センターを中心に、2012年9月から11月にかけて実施した。調査対象は、調査時点の1年以内での利用者で、各「あったか」が調査時点で把握できた431人である。なお、調査員となる各「あったか」職員には、質問の内容と面接時の注意点などを記入した「調査の手引」を配布した。集計・分析には、SPSSVer.15Jを用いた。

**3. 倫理的配慮**

調査結果は、研究の目的以外に使用されないことを調査員から利用者に伝えた上で、調査協力への同意をもらった上で、調査を実施した。調査票の回収の際には、調査票に記入されている氏名等の個人が特定できる情報がある場合には、各「あったか」に削除してもらった。また集計・分析の際にも、個人が特定されないようにした。

**4. 研究結果**

今回の調査対象となった利用者は、性別で見ると「男性」18.6%、「女性」81.6%、年齢区分で見ると「65歳未満」が5.8%、「65-74歳」が13.0%、「75歳以上」が81.2%となっていた。また、その世帯構成をみると、「独居」35.4%が最も多く、次に「高齢者と子」33.8%、「高齢

者夫婦のみ」21.5%)、「その他」8.6%、「児童と親」0.7%であった。

#### (1) 「集い」への参加による効果

「あったか」の主な事業である「集い」への参加による効果について聞いた結果、「気持ちが前向きになった」と感じる人が最も多く83.1%、次に多かったのが「新しい友達ができた」71.8%、「日常生活で話す機会が増えた」71.1%、「身体の具合や健康状態がよくなった」66.7%、「学んだことを普段の生活の中で生かすようになった」が59.0%の順であった。

#### (2) 集い以外の「あったか」による支援とその効果および今後、必要となる支援内容

集い以外の「あったか」による支援として最も多かったのが「病気や体調を気遣ってくれた」62.7%で、その結果、「自分でも普段の生活で病気や体調に気を配るようになった」と回答した人が82.4%に及んだ。次に多かったのは「家を訪問して声をかけてくれた」55.8%で、その結果、「これからも相談できる安心感が持てるようになった」と思う人が90.5%を占めた。その次の「買い物に連れて行ってくれた」49.6%で、「自分で好きなものを選んで買って良かった」と感じる人が98.9%、「外出できたことや気分転換になった」が97.4%、「どれを買うかセンター職員が教えてくれたのでよかった」が74.6%となっていた。最後に、「困りごとの相談に乗ってくれた」46.0%でその結果、「これからも相談できる安心感が持てるようになった」と感じる人が90.5%を占めた。

今後、必要となる支援内容として、「あったか」から受けてほしい援助について尋ねた結果、「家庭訪問による見守りや声かけ」(34.1%)が最も高く、その次に「健康や生活上の相談」(28.4%)、「買い物に連れていく」(27.0%)、「病院・医者に連れていく」(24.2%)、「食事の配達」(18.0%)、「一時的な預かり」(12.7%)、「あったかでの泊まり」(12.5%)の順であった。

## 5. 考察

地域の実情に応じて「あったか」の利用者及びサービス内容が異なるため、各「あったか」を個別事例として分析することに意義があるが、以下では、全体的な利用者効果の傾向について分析した結果に限って考察する。なお、発表当日は各「あったか」の結果・考察も報告する。

「集い」への参加による効果として、気持ちが前向きになったと答えた人が最も多いことから、「集い」は利用者にとって有効な情緒的支援策となっていると言える。「あったか」ではサテライト型サロンも展開しており、近くで定期的集えることができ、利用者の安心にもつながっている。一方で、「あったか」によっては「集い」において学びのプログラムを充実しているところと、そうではないところがあったため「学んだことを普段の生活の中で生かすようになった」と答えた人が最も少なかったことから、高知県として「あったか」として提供できる有効な学びに関するプログラムの企画、紹介に力を入れる必要があると言える。

また、集い以外の支援として「見守り訪問」、「外出支援」、「生活支援」、「相談」の機能が高齢者世帯にとって生活の安心につながっており、「あったか」は地域福祉の拠点としての役割を果たしていることが確認できた。さらに、今後「あったか」から受けてほしい援助として訪問見守りや相談へのニーズが非常に高いことが確認できた。このことから利用者が在宅での生活を維持していくために、「あったか」として訪問見守りや相談に関する体制整備が求められると言える。今後、各「あったか」の設置地域の実情や運営状況と利用者特徴を考慮した上で、経営の安定化と集いと各種支援の内容の充実のための県および各市町村の方策の強化が求められる。